

団長の独り言

1月29日(日)「通し稽古を行った」

13時から21時30分までの昼夜稽古に突入した。

これまでの3時間ちよいの稽古では、みんながのってきて、「よし、これからだ！」ってところでタイムアウトって事が結構あったけれど、稽古回数は残すところ約8回となり、全て昼夜稽古となるので、ガラガラせず時間を有効に使わねば！

そんな思いを胸に稽古場へ向かう。

開始15分前、稽古場に到着したら、全員が集合していて、芝居で使用するテーブルや椅子等をセッティングしている。活気があって、明るくて、笑顔、笑顔。みんな色々な事情を抱えているはずなのに、13時から21時30分までの長時間、大好きな芝居にどっぷり浸かる事の出来る環境に感謝をしているかのように、活き活きとしている。

ここまで来たら、「どうしよう？」ばかり言っているも始まらない。幕開きは待ってくれない。

今回も大勢のお客様が劇団ふあんハウスのお芝居を楽しみにして下さっている。

お客様の期待を裏切らない芝居をお届けする！という意識はみな一緒。

正直これからの稽古は、役者達にとっても演出である私にとっても正念場！

昼夜稽古の出来不出来が、そのまま本番に直結する。だからこそ元気にスタートしなきゃ。

みんなで平野カーク満載の道具類を部屋に運び込み、各自分担して小道具の準備や、効果音の打ち合わせ、衣裳の早替え等の打ち合わせと、稽古用の舞台作り。この日の稽古場は、本番と同じだけの間口がとれるひろーい稽古場なので、舞台セットの距離感をつかむために、舞台美術の三井さんが考察してくれた図面を見つつ、メンバー達が尺表示のあるメジャーで寸法を測りながら、「えーっとな、そこは9尺ね！」「そこから、この角度で3尺いって・・・」と言いながら、紐やテープを用いて床に実寸の枠を作る。

これまでは、本舞台の半分ちよいの広さの場所での稽古してきたので、実寸で仮セットを組むことにより、当然ながら動きも大きく変わってくる。

そこで、まずは「座長」の出るシーンを中心に各シーンの抜き稽古を徹底的に行う事にした。

すると広くなった事によって生じる違和感ある動きが続出したので、各役者の動きを調整すると、芝居そのものも変化してきた、「人生芸夢く夢のとおり道く」という、作品が立体的になってきた。

やっぱり広い稽古場っていいよなあ

って思いながら、抜き稽古に集中していると、あつという間に17時を回っている！これは大変！

18時には音響の野中君がお越しになり、今回の座組での初めての「通し稽古」を行う事になっている。

皆さんには申し訳ないけれど、普段一時間ほどとる休憩時間を45分程度に縮小してもらい、大急ぎで食事をとっていると、17時45分過ぎに、音響の野中君登場！

素早く食事を済ませて、衣裳を着たり、メイクをしたり、小道具の最終チェックをしたりと、まさに本番前のようなあわただしさで準備を行う。

そんな中で私は野中君と打ち合わせを行っている、彼が「25周年なんですね・・・」とシミジミと言う。

野中君は25年前の第1回公演から劇団ふあんハウスをずっと音響として支えてくれている。

25年前、彼は20代の青年だった・・・だから私の中では今も「野中君」のまま。彼は客観的な立場から劇団ふあんハウスの成長を見続けてくれていたんだよね。

「今回も、よろしくお願いしますね」

つてあらためて挨拶をして、さあ！気を引き締め第1回目の通し稽古の開始。通し稽古というのは、芝居を最初から最後まで通す稽古の事で、今まで部分的にしか行ってこなかった各シーンを繋げ合

わせて「本番どおり」芝居をする稽古なので、これまでの稽古とは様子も異なる。特に第1回目の通し稽古ってのは、場面転換時での小道具の処理や、早替え、役者の出ハケ等、様々な問題点が次から次へと発見される稽古でもあるし、何より「ちゃんと芝居として成立するのか？」がキチンと確認の出来るので、通し稽古ってのは、やっぱりいつもの稽古とは違う緊張感が漂う。

そんな中スケジュール通り、緊張の通し稽古を開始すると、出だしはいい感じ！しかし後半になるにしたがって、知らず知らずのうちに疲れが出てきたのか？くだらないところでセリフをとちるし、へんな間延びした芝居になるし・・・

観ているイライラしてくるが、通し稽古だから途中で芝居を止めるわけにもいかず、私の手元にある「ダメ出し用紙」に、イライラをぶつけるかの如く、ダメな箇所を殴り書きするが、その数がドンドン増えていく。土曜日の稽古終了後、かなり厳しいダメを出し、翌・本日日曜日。転換スタッフの舞ちゃん(木村舞子)が見守る通し稽古でも、なんとか「通す」には通せたけれど、相変わらず「何しとんねん！」って感じ。

それでも劇団内の雰囲気は最高にいい感じなのは、何よりの救いだ。この雰囲気こそが成功への道へとつながる。皆さん、次の通し稽古でも気合入れて行きましようねえ。